

我が子たたく手「包んで」

「私、虐待」打ち明けた

「誰もが陥るおそれ」NPO結成

子どもへの虐待が止まらない。なぜ、わが子を傷つけてしまうのか。母親も苦しんでいた。立ち直るきっかけになったのは、追い込まれた自分を受け止めてくれる人の存在だった。



「ずっと苦しかった。だれかに聞いて欲しかった」。主婦はそう語った。大阪府内、高木智子

大阪のベッドタウン、大阪府富田林市。古い2階建て民家から子どものはしゃぐ声が聞こえてくる。1階居間で母親が子育て談議に花を咲かせる。市内の岡本聡子さん(37)が2003年、仲間とつづいたNPO法人ふらっとスペース金剛の「はっとひろば」。

週6日、4、5人のスタッフが常駐し、育児相談に乗る。11年前の春、岡本さんは夫の転勤で大阪から東京に引っ越した。長女は4歳、次女は5カ月。次女はアトピーがひどく、体中をかきむしってぐずるのを一日中あやした。母乳に影響するため、食生活で

は卵・牛乳・大豆・小麦を抜き、30分台までやせ細った。まずは長女に向かった。ちよつとしたことで足や尻をたたいた。「お母ちゃんは鬼になった」。長女はそう言うて、おねしょや夜泣きを繰り返すように。慣れない土地で相談相手はいない。夫に「会社という逃げ場があつてええなあ」と食つてかかった。

その年の7月下旬、マンション8階のベランダから外を眺めた。富士山がきれいだった。「飛び降りたら楽になる」。両脇に2人の子を抱えたが、それ以上力が入らない。「なんて母親なんや」。その場に泣き崩れた。

子どもを連れて行った病院で、ソーシャルワーカーに

長男が自分をにらんだ

「今なら間に合う」電話

「午後3時までなら、夫に知られない」。たいてい子どもにあざができて、氷で冷やせば、夫の帰宅する夕方までに「散らす」ことができる

タイムリミットだった。関西に住む主婦(47)は3年前まで、中学3年の長男(14)と中1の次男(12)をたたき続けた。主婦自身、両親からた

「私、虐待しています」と打ち明けた。思い詰めないで」との言葉に気持ちちが染になった。週2回家事代行を頼み、夫も家庭と正面から向き合うように。次女の症状も改善して余裕を取り戻す中で、「壊れかけた家族を再生できた」。

「誰もが一線を越えるおそれがある。サポートしたい」。01年に大阪に戻り、通信教育で社会福祉士の資格を取つて「ふらっとスペース金剛」を立ち上げた。

「水の怖さをわからせるために浴槽に沈めた」「たばこは危険だと教えるために火を押しつけた」。そう話す母親らを否定せず、「しんどいねんな」と耳を傾け、不適切な行為に自ら気づかせる。

「煮詰まってしまう前に、SOSを発信する勇気を持つて。そして、周りの人は非難せずに受け止めてあげてほしい」(机美鈴)

たかれて育った。「しつけのためには当たり前」と思っていた。結婚して10年近く子に恵まれず、妹たちに先を越された。子育てにあこがれた。だが、育児書の説明通りにはならなかった。初めて手を上げ

たのは、長男がコップを握るようになったころ。テーブルに落とし、お茶をこぼしたからだ。次男にも、歩き始めたころから手が出た。

「ママも手が痛いんだから。怒らせる方が悪いのよ」。近所に聞こえないよう、昼も窓とカーテンを閉め切った。たたいた後は決まって気分が悪くなり、涙が出た。夫から「しつけは言葉で繰り返し教えるものだよ」と何度も諭された。

3人で家で過ごす雨の日は怖かった。長男をたたくと、手をグーに握りしめ、にらんできた。「向かってくる」。自分のように手を上げる親になる姿を想像した。

「今なら間に合う」。3年前、虐待防止や親のケアに取り組む講座「MY T.R.E.E.ペアレックス・プログラム」を主催する兵庫東西宮市の団体に電話をかけた。「どうにかなりそう。助けて」

週1回、同じ課題を持つ母親10人が匿名で語り合った。ため込んだ思いを一气にはき出した。「いい子に育って欲しい」と必死すぎたのね。そう励まされた。4カ月間参加した。その後、手を上げたことは一度もない。料理するのも手。抱きしめるのも手。手は、たたかためにあるんじゃないと分かったから。(高木智子)